宗像

毎月一日発行
定価一年送共250円
発行所
宗像大社社務所
福岡県宗像郡玄海町田島
電話 神湊 26の甲

宗像神社史上巻刊行さる！

昭和三十六年六月二十日の日附をもって宗像神社史上巻が刊行された。本書は宗像神社の神徳並に由緒が、精確な史料によって究明され宣揚されんことを目的として編纂されたものである。

編纂事業は宗像神社復興期成会の手によって、遠く昭和十七年十一月その発端を見、会長出光佐三氏の熱誠と共に推進されて来たものである。その間測らざる終戦によって一時中断された事もあったが、編纂委員を更新して着々とこれが資料の蒐集と執筆事業を進めたのであった。昭和二十九年五月には沖ノ島の学術調査を行い、夥しい神宝類の出土を見るに至り、神社の由緒に輝かしい光明が齎された事は関係者を雀躍させたのである。

これらが基となって愈々社史の本格的執筆に入り、編纂委員長小島鉦作氏（成蹊大学教授）同委員梅田義彦氏（文部省技官）同委員岡田米夫氏（神社本庁調査部長）の三氏の手によって研究討議が進められた。昼夜兼行といっても過言ではない、微労八年。こゝに全十七章のうち第七章迄を上巻として公刊される運び迄漕ぎ付けたのである。神社田緒の宏大なると共に本神社史の精確なること、他に類例一を見ない程の立派な学術書が完成した訳で、直接間接に関係せられ、協力支援せられた諸氏と共にこれを喜びたい。

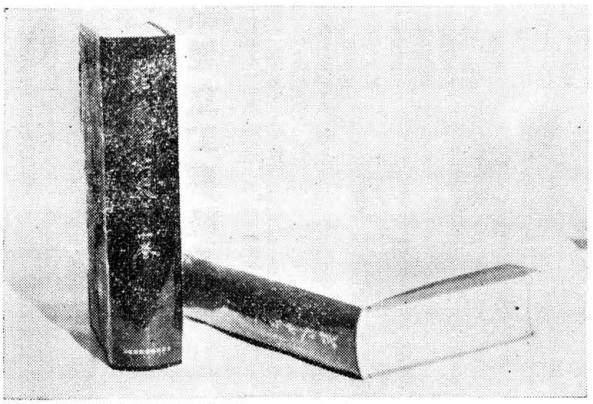
悠久の昔、皇祖天照大神より「奉助天孫而、為天孫所祭」との神勅をたゞいて此の国土に降臨されたわが宗像三柱大神の祭祀の創始と、更に今日全国六千二百有余社の分祀の宗社としての神威は、蹶来烱乎として輝いていることはこゝに繰り返すまでもない。九州北辺に在って崇高なる神格と国家鎮護の稜威とは夙に歴朝の御殊遇によっても知る事が出来る。

これらがすべて今回の神社史公刊によって学術的裏付として目のあたりに出来ることは、氏子崇敬者はもとより、全国民の喜びでなくて何であろう。

本書が如上の使命を完遂することによって、一般人士に歴史の真実と民族の精神文化の伝統とを深く認識せしめ、以て愛郷心愛国心の涵養に資すべき意義は洵にかりしれないものがある。

内容は先にも述べた通り
第一章　序　説
第二章　鎮座地・境内
第三章　社　名
第四章　祭　神
第五章　神　徳
第六章　社殿・造営
第七章　摂末社
の各章に分けられ、夫々精密な検討の加えられたあらゆる資料に基いて、懇切丁寧な案内便宜が附されたに熟筆せられている。

「そぞろに深い感慨なきを得ない」とある小島委員長の後記には長年に亘る御苦心の高感がこもっている。口絵二、図版五六、挿図一二〇、附図二が挿入せられた総員数七百二十頁に及ぶB5版の豪華大冊である。



宗像大社御用達
神祭具
奥装束
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話(37)八八六九番
振替口座京都一五八九一番

第六回宗像大社献詠歌会詠草

36、9、3於社務所（詠草到着順）

福間　中村　五郎
○森かげの光射し入る参道に朱塗りの鳥居見えて艶めく
戸畑　田中ハツセ
○里帰りすれば家守る兄嫁の今は落ちつき我もてなしぬ
神湊　隣　船　俊
○青草のもゆるがごとき海原に九十九島は牛の群に似る
戸畑　伊規須ゆき
○幼き日碩にうけし七夕の蓮の葉の露今も眼にあり
田島　小野　迪夫
○汗あへて校正の筆ふるひ居り夜半ごほろぎの声はきゝつゝ
吉武　原田　リノ
○来し友に体よく酒の座をゆづり外に出でしが忘れものせり
勝浦　永島　八重
○遠く来し孫は帰りつまぐろの尚さく庭にひとり水打つ
香椎　織田　像雨
○月なりて風ぞまさるゝこの夜ごろ鎖さるるものか窓の硝子戸
戸畑　山磨　昌子
○旅終へて明日は帰ると子の便り白百合の花机に挿しぬ
津屋崎　麦野　時雄
○いちじくを十数種類集め居れどなほも新種を探しつづくる
勝浦　永島　文子
○朝やけし蕨のはだへ薄らぎて秋気いよいよたちそめにけり
原町　中村　幸
○煤ほこり舞ふ街なかの板塀にそひてしだれし柳の青さ
武丸　立石　昇
○小夜更けて厠に立てばこほろぎの初音きゝたり秋立つ日なり
武丸　立石ろせ
○チリ〳〵と蜩けつく如き真夏陽の日向に猫のながくと寝る
香椎　桜井　秀
○憎しみの意識まつわるよごれとも見つゝ淋しゑこの室の汚点（しみ）
香椎　桜井　ツ子
（調停室にて）
○夜のみどり映す玻璃戸のひえびえとかく秘めやかに秋はしのびぬ
吉武　福原　正喜
○海女の群の浮く潮の面昏み来舟を呼び合ふ若き声々
深田　中野　節子
○鉢物に余忍なき夫右脚のまひの残れば小さきジョロ持つ
勝浦　永島　計七
○颱風の進路怪しきこの夕べ玄界灘は不気味なうねり
岡垣　長畑　房江
○衰えつゝ遂に此の夏を越へたりと法師蟬の声泌みて聞き居り
江口　辻野　開造
○日々を是好日とすごし行く老いらくの身も楽しからずや
沖島　前田奇之助
○日躍の度により来る釣天狗沖津御島も賑はひにけり
福岡　林　まつえ
○大阿蘇はあまたたふとくなつかしく只目をあげてじっと眺むる
田島　斎藤　惇
○久々くるゝさきの浜に息づけばはるかなり故郷対馬の方は
田島　久保　輝雄
○道遠く日は暮れむとす味酒の香を伝へなむ明日を行く児に
田島　三苫　重格
○居待月待ちし居れば松かげをすこしはなれてさしのぼり来つ
田島　神戸　幸夫
○初秋のみやしろの杜の朝まだきかしましく飛びかふ四十雀の群
田島　宇都宮　淳
○脱衣所の広告はげて揺れて居り秋風たち海辺さびしく
熊本　吉田　寧雄
○汽車にして芝苔ひらく半日のわづかな旅もどこゝはづみぬ

論説「あゝ、八波則吉先生」

宗像大社講師　難波江　通泰

頼山陽はしば〳〵播磨の間を往来して桜井の駅を訪ひ、楠子の大節、巍然として正道人心を萬古に維持すると感泣し、芭蕉は笠を打ち敷いて衣川の義臣を想ひ、ときのうつるを涙を落した。支那に於ても、例へば李白、今は老骨の身を以て紀上を過ぎんとしたが、その若き日の任侠の血潮は此処を黙過する能はず、張良の故事に魂を揺ぶって一管の詩を認ひ上げさせた。蘇東坡また赤壁に舟を泛べては三国争乱の昔を想ひ、その感懐を賦に託した。古往今来、いづれの民、いづこの地に於ても、その史蹟に先人の跡を思はざるものはあるまい。そこには、かの范文正の言ふ如く、或は感極まって悲しむ者もあろう。又、洋々たる喜びを感ずる者もあろう。更には先聖後賢の高古深遠の域に達する者もあろう。それは其の人それぞれによって大小深浅あるは免れないことであろう。

「鵠を真似る鴉」といふ。もとより鴉ノ類する我が身、鵠を真似て斃死するは好まぬが、此の八月より、お許しを得て我が国三千年の歴史・命脈と深き関繋を有する宗像大社に身を寄させて戴き、先づ第一に感じた事は、我が国体と当大社の尊き関係であり、次に感じた事は、当郡出身の先賢碩学であった。第二の点は今しばらくこれを措く。第三の問題、即ち我が心を惹かれた当郡出身の先学偉人とは他ならぬ八波則吉先生である。浅学未熟の身を以て八波先生を云々するは僭越極まりなく、無礼であることは繁より承知する所であるが、その流風の餘韻に曳かるるまゝ蛇足に筆を揮ひ、先生の高き精神に近づかんが為に大方の叱正を仰ぐことにした。

先生は明治三十一年九月東京文科大学に入学せられた。時に先生は年令二十一・二の青年であられたろう。その翌年の三月頃に先生は「寒夜読書」と題する一首を詠まれた。

アルプスを越え人こそ思はるれ雪ふる夜半にふみを読みつつ

これである。寒さ厳しき夜、思ひを通かアルプス越のナポレオンによせられてその豪壮を示された。ついで三十五年六月頃、すでに先生この時は金沢第四高等学校に教鞭をとって居られたが若葉かげ女のリボンかつ見えて「青葉茂る桜井の里」と詠まれて、大楠公の歌を歌ひ行く声にしば〳〵を留められた。その翌年、時も同じ六月の頃、「いとし子」と題して先生は

愧かしや今年やうやうあわわする子を持つて知る罪知根の恩

振りかざす醜の現の大刀すらも兜児の笑みは鈍るとぞ聞く

と詠まれ、又、一夏の歌」として二の花に縋して着けん其のかみの若武者ゆかし垣の卯の花

とも詠まれた。此等は蓋し先生三十五・六の時の作であろう。

而してその翌年、三十七年一月十日に父君孫四郎氏逝去されるや先生は慟哭して

わが父はあゝあ我が父は我が父は呼べど叫べどただ松の風

ともすれば夢かとばかり幾度かいましし父の部屋に覗きぬ

などの数首を詠まれた。

ここに引くところ確か七首に過ぎぬが、しかし見よ、先生三十才代の精神・気魄は、ナポレオン、若武者の古今豪快爽雄の古武士の姿であり、又、楠公の忠烈義勇の精神であり、而して我が子に寄する慈愛であり、親を思ふ切切たる子としての心情ではなかったか。

「孝は百行の基」といひ、「忠臣は孝子の門より出づ」とは古来萬人の口にするところ。近年、漸く占領政策の悪夢より覚醒して「孝」という言葉を聞くに到ったが、しかし「忠」にいたっては、世人殆んど時勢を憚り、世間の顔色をうかがって、これを口にし筆にするを恐れるをいまだ常とする。しかし乍ら、我が国三千年の歴史・伝統は、更に言へば人倫の本然・自然の姿は、いま八波先生若き日に服し上げられた「忠孝」以外には無い筈である。

今を去る六十年の昔、郷土の先輩八波先生は、その青春の時代に「若武者ゆかし垣の卯の花」と詠まれた。今日この気魄を以て先賢の遺志・遺業を継承する「若武者」は、それ、誰人であろうか。

（原文のまゝ）

阿蒙少言

初対面の人がその子弟の就職を頼む、依頼者はでもよく知っているなら兎も角、本人の片鱗も知らず信をおけない者を如何なる職場にも推薦出来ることではない。不誠意はやがて不誠意の結果を産む、一切御免を蒙る●或る女性に縁談を持ち出した、幸福になれるだろうかと聴く、嫁いでみねばわからぬと答えた。これで蓉、所謂仲人口の無責任さは怖れねばならない●職員の机の上がその引出を見れば、仕事に忠実であるか否かがわかると老練な実業家が語った●古いから尊いと言う、古いから尊いのではあるまい、尊い歴史を持っているから尊いのであろう●文化人は新しいものを追う、この傾向が極端になると古いものをそなたらに排棄したがる、文化生活を電化生活と心得ている者もある、便利で衛生的な電化施設の家屋に住み多くの余暇を作って好きなことを楽しむ、それを理想的な文化生活だろうか、果してこれが文化生活だろうか、第一義の電化より自己の人間化が第一義ではなかろうか●子供が河に落ち込んだ、泳げない人が夢中で飛び込んだ、子供は無事に助けられた、この夢中の躍動を思案も躊躇もない純粋無雑の人間性の発露であって、単なる善行と言えない尊いものを感ずる。それは人類の祖先が人間の血の中に伝えたもので、その始原は神に遡る●協力の名のもとに安価な妥協がある、敬意の名のもとに姑息な追従がある、斗争の名のもとに自己の利益のみを求める独善がある、いづれもよくないと知りながら正気で横行している●小さい家の庭作りに家族の好主張が異って争論が起る、家庭にさえ広い世間の庭作りの困難を思わせる縮図がある、蜩が呼ぶ草花いじりをやめて安居秋空を仰げと。（白雲）

福間町　畦町の道標

宗像町田熊に住む県議花田新太郎氏曰く、

「わしらの小さい時は、田島の放生会といえば前の日に貰うた十銭玉を握って、朝の暗いうちから神輿（福間町）のあたりを出発して、とっとっと走ったもんじゃ。貰うたのはたった十銭ばって、一年に一度の放生会じゃもん、嬉しうしてく、あの頃の思い出は忘れんなあ」

「うんそうだな」相槌を打ったのは安部一義氏（剣道七段・剣連宗像郡理事長）である。

勿論当時は自転車でさえも郡内に何台かという時代であったから一里が二里も歩きに歩いて田島様へお参りをしたであろう。十銭玉を汗はむほど握り締めて夢中で歩いているいじらしい子供たちの群が目に浮ぶような気がする。

放生会、宗像放生会くらい懐しいものはない という。どんな大人にきいてもそういう。何故に田島の放生会がそんなに良い思い出なのであろう。それは先月号に「万民繁栄の祖神宗像大社」と題して書いてあるように、宗像放生会は、年に一回の全郡の大祭れで、郡民はじめ誰でもが心おきなく楽しくお参りが出来、一日中境内の催し物を見ることが出来たからである。

小さい者には小さい者たちの、大人には大人たちの、夫々の楽しみを満足させてくれた放生会に対するあこがれが、今に至る迄人々の信仰を支えてくれているといってよい。

×　×

こゝにあげた写真は福間町畦町にある宗像参道遺跡である。江戸時代に建てられたもので、石質は軟い地石である。（銀屋崎のワタリ石）雄こんだ筆蹟が石面一杯に存分に躍っている。

放生会、宗像放生会くらい懐しいものはない という。どんな大人にきいてもそういう。何故に田島の放生会がそんなに良い思い出なのであろう。それは先月号に「万民繁栄の祖神宗像大社」と題して書いてあるように、宗像放生会は、年に一回の全郡の大祭れで、郡民はじめ誰でもが心おきなく楽しくお参りが出来、一日中境内の催し物を見ることが出来たからである。本郡は昨年保四年（一六四七）には五八ケ村で、高四九、二八八石余でほゞ廻長（一六〇〇）の頃と変らなかったが、幕末の天保（一八三〇—四三）の頃になると四ケ村、高五八、二六四石余と増加しているのである。

こういった社会状勢下に於て宗像放生会が盛んになったのは尤もなことで、そこにこの道標の建設された意義もあるのである。

一枚の遺跡写真を眺めながら、「郡民のまつり」が生きゝと生き続けていることを痛感する。

江戸時代には大名の参勤交替が行われたが、本郡はいわゆる二十一宿の街道筋として、福岡、宗賀両藩等の参勤交替の交通路に当っていた。即ち黒田候は江戸参府には、福岡をたって博多・箱崎・香椎・青柳から福間町の畦町、宗像町の赤間を経て、吉武・狼田峠を越え、庭井野に出で、黒崎から小倉を経て大里に於て乗船、下関に渡ったのである。博多方面から、その街道によって当社に詣でるものは、畦町から左に分岐する道入るのであって、その道案内に建っているのが写真の道標なのである。

この道標は恐らく郡内の何処からでも宗像参道に当るところには大抵建てられていたと思われる。多分、今の池田の炭砿附近、田島福田のあたり（往時、釣川の橋があったあたりか？）、宿の谷（これは最近石標が倒れている）ほか街道の要所々々に建てられていたであろう。江戸時代建立のものは、その時代の社会状勢を反映するものであろう。

当代は二百数十年にわたる平和が続き、黒田藩の施策よろしきを得て、河川道路の改修、修築、新田開発が進み、民生が安定すると共に藩路も発達を遂げ、生産も上昇したのである。本郡は正保四年（一六四七）には五八ケ村で、高四九、二八八石余でほゞ廻長（一六〇〇）の頃と変らなかったが、幕末の天保（一八三〇—四三）の頃になると四ケ村、高五八、二六四石余と増加しているのである。

心字池一部埋立工事終る

八月号に発表しました通り、宗像大社神門前の心字池の埋立工事が完了しました。去る八月二十四日、内山緑地建設株式会社の施工によって、ブルトーザー及びダンプカー数台の活躍によって六月三日間で終了しました。正に機械化時代の感を深くした次第です。

あとは用水管の埋込み、細部補修等に数日を費やしましたが、写真で示しました通り社前の様相は一変しております。

これによって宗像三柱大神の御像大社神門前の心字池の埋立工事が完了しました。去る八月二十四日、内山緑地建設株式会社の施工によって、ブルトーザー及びダンプカー数台の活躍によって六月三日間で終了しました。正に機械化時代の感を深くした次第です。

あとは用水管の埋込み、細部補修等に数日を費やしましたが、写真で示しました通り社前の様相は一変しております。

これによって宗像三柱大神の御神徳の一端である「交通安全」を祈願される各種車輛が、社前にが混雑し又衝突する（曽て手水舎にぶつかり、また車輛同士で軽微な接触があった）等の事故が解消されるものと関係者一同喜んでいる次第であります。

はじめ、久保宮司がこの発案をした時には由緒ある御池を埋めるものがあるもんか、とか、お宮の風致を害する、とかの一部の意見が聞かれましたが、結局関係者の快諾を得てこの壮挙が完遂された訳です。

今では、広々とした社前の趣かかえって風致を添えて、実際に参拝された方ならおわかりの通り以前よりも爽々と見えます。神社史上からいって世紀の大英断でありましたが、この池を埋立てた事によって神社としての社頭の活動が活潑になるならば、それが御神慮にそい奉るものと確信する次第でございます。

いつかも申上げましたように、神社というものは常に民衆と共にあらねばならない、否むしろ時代に先行して民意を反映し、活動する物であるべきでなければならない、との下地から、此の度の措置がとられた訳です。

どうやら放生会の間に合いましたので、今年の大祭には露店等の配置も余裕たっぷりに出来るでしょう。

十月祭事表

十月一日―三日　放生会大祭

毎日午前十時祭典斎行

◎神賑行事

一日　浦安舞・風俗舞

二日　翁舞・流鏡馬・中学角力

三日　浦安舞・風俗舞

一般奉納角力

一期間中「田島市」露店

数百軒開店―

十月九日　振社織幡神社秋祭

十月十二日　末社的原神社秋祭

十月十五日　月次祭

十月十七日　神宮神饌奉献拝式

宗像大社宝物紹介

沖津宮神宝の香炉状品を紹介します。

全体の姿は椀の形で、中帯に双竜唐草文を透彫にし、上下帯に蓮花弁を並べたものであります。

下端の輪縁には小孔が穿たれているので、ここに他の物をしばり合せたものか、飾りをつけたものと思われる。

用途は全く不明で上面の中央には方形の孔が穿たれ、蓮の中房にあたる所には一字を刻んでいる。

甲と見えるが、甲か申かで符号ではなかろうか。

との学者の説もあります。

上面の蓮弁が九弁であることは特に珍らしいと云われています。

竜唐草文を透彫にした、この蓮弁は一弁に子葉二枚を

並べ刻み、飛鳥時代にも盛行したので奈良時代を下らないと云われています。

竜文は首頭また唐草文様化し、

現在のところ、自動車等が埋立てた所へ直接乗り込んでも何等差支えありません。未だ軟い所は縄を張っておりますので此の点は祈願される方は御安心下さって結構です。神門に向って右側の御池は全部残っており、左側の池は（今度埋立てた池）少部分わざく埋め残してあります。これには風致上又危険防止の上からも、上品な欄干等の施設もせねばなりませんが、とてもそこまでは今回は付帯工事なれば、なるべく早く出来ますように、と関係者一同喜んでいる次第であります。

宗像大社宝物紹介

沖津宮神宝の香炉状品を紹介します。

全体の姿は椀の形で、中帯に双竜唐草文を透彫にし、上下帯に蓮花弁を並べたものであります。

下端の輪縁には小孔が穿たれているので、ここに他の物をしばり合せたものか、飾りをつけたものと思われる。

用途は全く不明で上面の中央には方形の孔が穿たれ、蓮の中房にあたる所には一字を刻んでいる。

甲と見えるが、甲か申かで符号ではなかろうか。

との学者の説もあります。

上面の蓮弁が九弁であることは特に珍らしいと云われています。

竜文は首頭また唐草文様化し、

並べ刻み、飛鳥時代にも盛行したので奈良時代を下らないと云われています。

竜文は首頭また唐草文様化し、

西鉄楠根副社長　宗像大社責任役員に就任

九月一日の責任役員会に於て宗像大社の責任役員現在九名のところを一名増加することに決定しました。西鉄の楠根副社長に交渉した所、同氏の快諾を得たので神社規則のうち責任役員数の箇所が訂正されます。西鉄は大阪以西最大の交通会社であり、交通安全の守護神である宗像大社とも此の点因縁浅からざるものがあります。今後諸般にわたって相互提携して、宗像大神の御威発揚と万民豊楽のために努力して行きたいと存じます。

楠根氏の御自覚を祈って、こゝに御報告申し上げます。

宗像大社　社務日誌抄

八月一日　夏季大祭、高宮地主祭

午前八時、辺津宮午前十時、摂末社祭午前十時三十分。

八月二日　夏季大祭二日目、午前十時。

八月三日　戸畑高等学校教諭難波江通泰氏着任。

八月六日　志賀海神社七夕祭助勤の為職員二名出向。

八月七日　全国氏子総代会長佐藤尚武氏参拝来社。

八月九日　古賀町観覧作社長来社。

八月十五日　月次祭、高宮地主祭

九時、総社祭十時斎行。午後三時より秋季大祭の件に付職員会議開催。

八月十八日　県総代会長渡辺氏来社。

八月十九日　県教育庁へ收納庫の件に付職員一名、大阪宗像会挨拶の為職員一名出張。

八月廿二日　内山緑地建設株式会社塚本〆大氏外三名、心字池埋立工事の件に付来社。

八月廿三日　県教育庁筑紫豊氏外三名来社。福岡県神社庁宗像支部会出席の為宮司外一名出向。

八月廿四日　郡内各町教育長会議午前十時社務所に於て開催、麦野外九名出席。神字池埋立工事本日より開始。

宗像　談話室　歌謡曲　才二国道（其の二）

白雲先生と

「人間はねえ、馬鹿にならにゃわしは沢市になってお里の手を引かにゃならん」と時々謳らす。禁酒提唱の心理的大変化は、先生自身の喫さんに対する心づかいからであることは否めない。「かかさんにおこられんようにせにゃいかんばい」という言葉を若い人たちが複雑な気持で承っている。

× ×

酒は酒の心理的大変化は、先生自身の喫さんに対する心づかいからであることは否めない。「かかさんにおこられんようにせにゃいかんばい」という言葉を若い人たちが複雑な気持で承っている。

× ×

「人間はねえ、馬鹿にならにゃ

たらかかさんにおこられるばい」という言葉が先生の口から出る。喫さんには一目置いているらしい。しかしそれは恐れかしこんで頭が上らないというのではなくて、そこには喫さんに対する限りなき愛情が感じられる。長年の家庭生活の間にも喫さんには一度として荒い口をきいたことがないという。この喫さんがまたよく出来た方で、先頃までは「酒豪」で聞えていた白雲先生のよき伴侶として貞淑の誉れが高い。最近先生の酒量が減った。いやむしろ禁酒に近い。喫さんがほっとした。肩のいかんばい、何もしらんことはけるのが一番、ただしこれは容易ではありませんがね」

先生がこんなことをいう時がある。曽て、文豪菊地寛が愛嬢の結婚にはなむけした言葉に「十を知りても知らざるごとくせよ」とあったのを思い出す。人間、知っていて知らん顔をするのが一番難しい。知りもせぬことを知ったふりをする世の中だからである。先生の世常よく見ていると、大概のことは知っている。しかも微細にわたって知っている。それでいて決して自分からは口に出して言わない。若い人の問題などには親身も及ばぬほどの配慮をする。にもかかわらずふだんはゴーケツに見えるから不思議である。

× ×

人情にもろいのが先生の短所、というよりは長所である。先頃、大和のさる大社の宮司が訪ねて来た。以前ちょっとしたいきさつがあって暫く文通が途絶えていたのに、顔を見た途端にそんな感情は氷解してしまった。「よく来たな」と、学生時代の昔にかえって老友がさし向いになると、互いに盃を交す。禁制の掟？もなんのその盃を重ねるに従って話はザックバラン、お前、俺の昔にかえってしまった。白雲先生の方から「俺から歌おうか」といい出して「第二国道」のひとふしが唸られる。余程感興が湧かないと出ないこの歌が老友の為に歌われたのである。

その老友も「わしのは門外不出で」とか何とかいい乍ら、か細い声で何か歌い出す。老友同士向合って折からの五月の雨を、酒のしづくか涙の雨か、二人の目頭にキラリと光るものが見えて、渋い歌声がいつまもいつまでも聞えていた。

× ×

先生は字がうまい。曽て垣父から「お前の字は南無妙法蓮華経のようだ」といわれたとか自身で話していたが、どうして達筆である。正月だったか、関係者から是非と所望されて、仕方なくなく（内心はマンザラでもない？）軸物を書いた。所望者が感謝感激したことはいうまでもない。

先生の字は威勢よくおどっているようで、何処かデリカシーな所がある。字は性格を現わす、とはよくいったものである。若来日熟味を加えて来た先生の側面が窺えておもしろい。曽て「雷親爺」と異名をとったこのへんにして、このことが何ともいえぬ実感をともなうのである。

× × ×

「いろいろな意味で神職は神前の掃除夫でなければならない」というのが先生の持論である。神社の職員は日に一度神殿の掃除をする。その時に先生は自分の竹ぼうきを持って現われる。どんな人が参拝に来ていようが構わない。白装頭を振り振り先生はタバコの吸殻や紙屑を拾って歩く。少し前ごゝろになって大股にひょこひょこと神門のあたりをうろついている先生の姿を、若い職員が限りない尊敬と信頼の目を以て見ている。ていさいがわるいから、などといってとめるようなヤボ者はもはやこの社には居ない。元官幣大社の由緒ある大社の宮司にしてこのことあり、ウチの親爺のほかに誰が神前のゴミを拾って歩いている者があろうか、というほどりすぐり持っているからである。

× × ×

× × ×

× × ×

（来月につづく）

神事解説　続　秋の神事

新暦でも十月といえば、もう朝夕は肌寒い。東北、北海道では水稲の季節である。野山は色づき、人々はいよいよ秋のとり入れに忙しくなる。まして旧暦の十月は、普通では新暦の十一月頃にあたり、すでに農事は秋じまいにはいる。とり入れの済んだ田畠の土が顔を出し、村や町の経済事情も漸く活潑となっている。

十月は、中稲から晩稲が次第に刈りとられ、済んだところから順次に**神送り**（田上り、神立ち、神渡し、神帰り）が行われ、神々はもとの山へ戻られる。

愛知では九月三十日の神送りを田の神送りといっている。静岡、水戸市附近其の他でも、家毎に餅をつき小豆飯を炊いて祝う。無論この日付が東北と九州では一ト月以上ずれることがある。改暦期が西の方ほど遅れ、従ってこれに伴う田の神祭日の異ることはいう迄もない。

俗にこの月を「神無月」というのはこの為であるといわれているが、それは間違いである。実際にかける神無月の意味は、この月は次の月の新嘗祭を迎えるにあたり、この祭が春の祈年祭とともに最も厳重に斎行せられなければならない立て前から、一カ月の潔斎を必要とした為に、他の神事をせずに物忌にもる月であると考えるべきである。

神無月とは全国の神が出雲に参集されるという俗信は奇妙に行き亘っている。しかし仔細に検討すれば不合理や矛盾は簡所に見受けることができる。

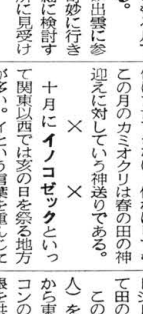
近畿以西では普通九月晦日神々の旅立ちの日とされ前の宵から参詣する。土佐のオミタテマツリ、岐阜のカミオクリは、十月三十日や翌年正月カミムカエをするが、駿遠二国及び佐渡の一部では九月晦のカミオクリはするがそれに対するカミムカエは無い。

九州北部の海岸地方では神々の出雲旅行が可成り信じられており、出発をカミワタシ、帰還をカミモドシといい、それに都合のよい風が吹くといって、この前後に夫々神社の祭を行う所が少くない。

対馬では九月二十九日を総神渡し、佐渡でも九月二十五日はテンジンオクリといって天神様が出雲へ酒造りに行かれるという。こういう神々の名称や働きを知っているのは神職であるのでこれらの行事に関する事柄は神職のPRによるものが多いであろう。

以上の事例は枚挙に暇ないが、当の出雲では神無月に対して神在月の説を立てるムキがあるがはっきりしない。同国佐陀などでは十月二十八日にシバガニオクリ、カラサデノカミオクリの行事がある。

カミナシは醸成だという文学者


十日夜のおそなえ（群馬・長野）

のうがった意味があるが、これも俄に首肯できない。何れにしても この月のカミオクリは春の田の神迎えに対している神送りである。

× ×

十月に**イノコゼック**といって関東以西では亥の日を祭の地方が多い。イという言葉を重んじたということもいえる。鳥取では春の亥の日に降られた田の神が十月亥の日に還られるといって重要な節がわりの日としている。鹿児島ではこの日に田の神を行う。干葉ではこの日は姙婦の信心日で餅などをつくって弁天に詣る。イノコ正月、ミアリ正月などといって新穀の料理をたべる所もある。長崎県地方の少年たちの亥の子つきの歌

十月亥の日にゃ餅をつくの餅をついても客がない亥の神さまを客にしてわたしも相伴いたしましょう

宗像地方でもイノコツリを行った。（志賀島でもイノコサンというう）旧十月の亥の日に白の上に箕を置いて餅や赤飯を供えて祝う。

その時の餅つき歌に

鬼生め　蛸生め

つののはえたる

子持たせよ

と、いうのがある。

十月二十八日から三日間暦屋明神のおくんちがある。兵庫、淡路でも亥の神をまつる。祭壇のつくりが祖霊祭に似ているのは注目される。福岡では亥の子場で子供らが小屋がけして遊ぶ所がある。そこにはその年に子供の生れた家から餅が贈られる。

亥の子つきは、各地で行われるが、これは「もぐらうち」の行事によく似ている。

亥の子の日に対して、中部、関東には十月十日を節日とする**十日夜**や**トウカンヤ**が多い。

塙玉、群馬、山梨、長野などでは大抵餅をついて神を祀る。また十日夜をカガシアゲをして、ソメトシトリ（ソメはカガシ）といって田の番人をまつる。

この日にサツキトウド（五月田人）を招いて御馳走をする。中部から東北にかけては、十日をダイコンのトシヤといって、葉付の大根を供える。（この例はほかにも沢山ある）季節の食物を神にささげてまつる風習は、わが国では意味のある慣習である。この場合の大根も勿論その例にもれない。

秋の收穫とともに、村々では所謂「**あえのこと**」が行われる。初穂を神に捧げて感謝の意を表するとともに、これを相伴（神と共に人間もいたく）して神人和楽の境地に幸ることを示しているものである。香取神宮の大饗祭はその最も盛大なる祭典で餅食であるためにこう名付けられたものである。この楽しみは又、紅葉祭（阿蘇、金刀比羅）の名にふさわしい優雅な行事にもなっている。

在福宗像人会開催さる

九月十九日（火曜）午後五時半より、福岡市天神町「クラブ九州」二階に於て、在福宗像人会が開催された。これは春秋例会の秋の部である。会する者およそ四十名

先ず新出光石油社長、出光弘氏より同郷人の親睦の会としてこの会合の意義の大きいこと、藤井副知事、北九州五市合併事務局長、田母半三郎氏に対する歓迎祝賀の挨拶などがのべられた。

次に各自、自己紹介を兼ねて短い挨拶があった。

林井護士の法曹界渡りある記、花田学大福岡分校主事の学大合併苦心談、石松学大教授の三職（法曹人、教員、宗教家）観、俵口光雄氏の福岡県バスの草創時代（赤間、神湊間路線）と宗像大社との因縁話などが印象的であった。

次に地元から招待出席した鎮国寺住職、立部瑞祐氏の護摩堂建設についての挨拶と、宗像大社権宮司小野迪夫氏の「月刊宗像」編集苦心談などがあった。

最後に高橋昇老人が立って「生命の神秘」について語られ、生存の欲求、色食の慾求について近く博士論文を書くつもりである冒論及するや、会員一同の爆笑と拍手が一きわ高く続いた。

食事も液体も程よく廻った頃には、あっちに一固りこっちに一固り、夫々に故郷の話しに時の経つのを忘れた。

終りに出光会長から、来春の例会には田島の宗像大社、鎮国寺参りをしようとの提案を一同了承して午後九時散会した。当日の出席者、左の通り（敬称略）

出光　弘　高橋　昇
篠原政次郎　田中　嘉三
青本　寿　申母半三郎
石松　康夫　伊豆　猛捷
花田賢一郎　馬場　隆
尾島彦三郎　斧瀬　富太
山岡　憲一　八尋　君平

秋深し

町村往来

青年団運営協議　郡青年団協議会では3日午前10時から中央中学校で支部長以上百五十人が集まって青年団の活動、運営など話し合う

宗像町の商業講座　町公民館、宗像信用組合が共催で3日午後1時から同組合二階会議室で県商工連合会上野幸介氏の『商工会活動と新しい商店経営』の講演がある。

生ワクチン協議会　保健所は6日から郡内小学校の一年から三年生まで中学生の中堂に生ワクチンを投与することになり、4日午後1時から保健所で町村長、教育長、小学校長らを招いて投与の日程などを決める。

宗像町　レクリエーション講習会　公民館主催で婦人会を対象に開く。日程つぎのとおり。△4日午後2時河東小△5日午前8時半吉武小△6日同南郷小△7日同東郷小

養老施設慰問　宗像町用山婦人会の田畑クニエ支部長ら会員二十数人は3日緑風園をたずね白米や菓子を贈った。

東部地区児童水泳大会　5日午前10時から中央中学校プールで支部長以上百五十人が集まって青年団の活動、運営など話し合う

宗像町原水爆禁止協議会　5日午後7時から役場で世界大会の報告などがある。

金刀比羅神社秋祭　津屋崎町在自の金刀比羅神社では9、10両日秋季大祭を行なう。初日は午後3時から神幸、10日は五穀豊じょう、海上安全祈願。

寄付　玄海町鎮崎古部幸一さんは転宅記念としてこのほど岬小学校に金一封を贈った。

慰問　津屋崎校区婦人会の吉田会長ら会員二十人は6日緑風園をたずね、菓子、衣類などを贈ったり、としよりたちに演芸をみせて慰めた。

養老施設慰問　宗像町吉武岡部マイカ製作所の伊豆丸ヨシエさんら従業員十数人は8日緑風園にお菓子を贈って慰めた。

重松宗像警察署長歓迎会　剣道連盟宗像支部では9日午後5時から同署で催す。会費五百円。

理科作品大会　郡小学校理科研究部は10日午前10時から郡内三カ所で小学生が夏休みにつくった飛行機、グライダーなどを飛ばして競技する。

東郷校区体育大会　10日午前9時、宗像町中央小学校。

囲碁大会　赤間地区給協囲碁部主催、10日午前10時、宗像町土穴公民館。参加者は郡内自由。

津屋崎町のレクリエーション　同町青年学級は10日午後1時から。

保健主事、養護教諭研修会　13日午前9時半、河東小学校。県学校保健課橋口健次郎氏の講演がある。

視察　津屋崎町青年研修所第二期生ら三十五人は12日粕屋郡古賀町の生活養豚、養鶏の飼育を視察。

東郷校区体育大会成績　10日中央中学校で行なわれた。成績つぎのとおり。【バレー】❶東郷町❷田熊村❸田熊町【ソフトボール】A組❶田熊町❷東郷町△B組❶田熊村❷光井【リレー】❶田熊村❷田熊町❸東郷町

募集　年齢四十歳以上、郡内居住者、毎月第三日曜日（本月は17日）午前10時宗像高校庭球コートで交換、終了後懇親会、会費毎月二百円、ラケットを持たない人には貸す。雨天の場合は次週日曜日、参加者は宗像高校体育館あて15日まで申し込みのこと。

南町公民館落成式　福間町南公民館で13日午前10時から。

宗像区保護司会臨時総会　15日午前9時、町村会館。社会を明るくする運動の結果報告、ケース研究など。

津屋崎町の映画学級　15日岡ノ三、16日北、17日渡、18日梅津、19日生家、20日羽多田、21日在自（以上映画はこどもの小使いのあたえかた）24日練原、25日本村、26日上松（以上同生活改善について）

津屋崎町定例町議会　15日午前10時、町村職員退職手当組合設立など審議。

玄海町懇談会　同青年団は16日午後8時半宗像神社清明殿で町議会代表者と町政などで懇談。（西日本新聞より）

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社　大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話東郷27番

沖ノ島の忌詞（いみことば）について（三）

越智　汎愛

四、沖ノ島の忌詞の種類

沖ノ島の忌詞については、新刊の「宗像神社史上巻」の中にもある通り、貝原益軒の記述を始め、諸書に収録されているが、その詞数はあまり多くない。然し私が二十数年前に島の古老から収録した時には五十数種あった事を記憶している。その記録も今は手元になく、又現存の古老ではっきり覚えている人も少いが、以前新聞で発表された分などをまとめて次に掲げてみよう。

○筑前国続風土記（貝原益軒）

「此島に忌詞多し、常の詞はかれ也と云、僧尼出伏女人牛馬距鼠林は皆別名有」と記して具体的例証をあげていない。

○宗像三社縁記（貝原益軒）

死　くろやうせい　女　ほとめ
僧　まるやうせい　衡　ためし
小便　くろとり　升　はかり
味噌　なみのはな　酢　みみとり
塩　なみなが　味醤　ひしほ
尼　かみなが
六畜類　よつ

以上十一詞をあげている。

○防人日記（青柳種信）

「此の島に忌詞あり、仏経僧尼等を始め不器やうの物にお忌詞あり。されど古のは失せ果てたりとみえたり。今いうは壱岐人が定めつると覚しくいやし。」

これも例証をあげていない。

○福日新聞（今の西日本新聞）

飯　キワ　箸　ヨロズ
杓子　キワマガリ　酢　ミミトリ
醤油　タマリ　酒　チンタ
岩・石　タマリヤ　礎　イナマキ
火箸　ヒゾー　牛　ツキヨツ
小便　アマケ　大便　ゴーヤ
味噌　ヨーセ
味噌汁　ヨーセノヨーセノ

以上十四詞を掲げてある。新聞の切抜きで、年月日を記入していないので確実な事は分らないが、昭和十年前後の七月初旬頃に掲載されたものである。米田という記者の大島訪問記であるが、島の古老からの聞いたものか、前掲以外の記録からとったものかは判明しないのが残念である。

○古老の伝承　佐藤市五郎　七五
河辺嘉十郎　七〇

沖ノ島―オイワズ（不言島）

以上沖ノ島では他の場合と同じく、古来「シ」「ス」「チ」の音を忌んだと言われているが、右の例でも分る様にこれらの音をさけんが為のものが多いわけである。

又三社縁記に「此島には神事をむねとし侍れば、神事にけがれある物をいみて、まさしき名をいはで、名をかへていふ」とある様に音だけでなく、神事にけがれあると思われる物体をも、そのまゝの呼称をさけているのである。

或は不吉不浄に関係なさそうな物体にまで忌詞を使用したり、更に忌詞を使用する必要のないと思われるものを、殊更に忌音のシ・ス・チを挿入した忌詞があったりして、私には解ない点が多いのであるが、防人日記に云う如く「今いふは壱岐人が定めつると覚しくていやし」き為なのだろうか。

実は、私はそうした忌詞が、歴史的というか、民俗学的というか、何か隠された意義がありそうに昔から感じていたのである。

五、沖ノ島忌詞の概説

1、逆説的使用例

小便―アマケ（甘気、雨気）
尼―かみなが（髪長）

これは神事にさわりがあるとして反対の詞を設定したという以外には深い意義はないと思われる。

2、古語慣用例

味醤―ひしほ。醤油―タマリ
大便―ゴーヤ。

便宜上こゝに香煙発行の金田一博士の辞海をくって見ると、「ひしほ」はなめみその一種、「タマリ」はミソからにたった液、又たまりじょゆうと話してある。「ゴーヤ」は則（カワヤ）としてあって、いずれも古くから使用されたものである。尚柳田国男先生の「地名の研究」には壱岐琉球では現在、大便の事をゴーヤと言っている事を記されている。

3、外来語転用例

米―シャリ（梵語・朝鮮語）
酒―チンタ（ポルトガル語）

辞海にシャリとは仏舎利の意の外に、死がいを火葬に附し、残った骨の朽ちずにあるもの。又色が似ているから「こめつぶ」白米。と記してある。骨のことを梵語で仏舎利などの如くシャリという事はよく知られている。金沢章三郎博士の研究では朝鮮の古語で米のことをシャリという云われているが、元来の朝鮮古語であるのか、或は火葬の骨片が米に似ているし梵語の舎利が朝鮮語に混入したという仏教の伝来に関係があるのか分らない。日本でも歴史的に使われるシャリ（米）は日本古語でなく、確かに外来語である。

私は支那事変応召前、酒の事をチンタという沖ノ島忌詞を不思議に思っていた。（つづく）

× × ×

宗像伝説　祭りさまざま　其の九

宗像には昔から変った祭りが沢山あって、今も尚昔の形を残した氏神祭が伝えられています。

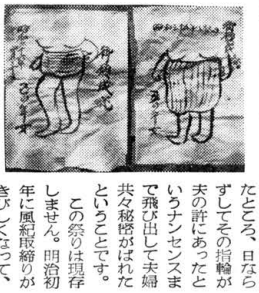
須恵の「福足宮の石かげ」といって夏の祇園祭と秋の宮日祭の当日、一戸一人宛、遠賀郡の波津浦の海岸に行き、未明を期して一斉に後退きながら、海中に進んで最初にあった石を手探りで拾い上げ（かたげて）一定の場所に積み重ねて帰るのです。その時に持てないような大きな石に当れば、其の年は運が悪いといって又海中に入り直します。それから氏神様に集って祭典に参加する訳です。

平等寺の白鬚宮は生神様だといって、秋の宮日祭のお供物は当番五軒で、春から御供飯煎焚其の他一切女にさわらせずに男手一つで作り上げて献供することになっています。一ケ年の精進潔斎が行き届いておれば生神様が刃物で切り取ったように御供物をお上りになる。それで当番の申送りが無事済みます。その為、其の年の当番の人達はその年一年は近隣親族の不幸にも立会わないきまりになっていますので、或る年の当番に不心得者がいてけがれた取扱いをした為、神さまが一週間も二週間もお供物をおあがりにならないので大評判になったと今に語り伝えられています。この神事は今も伝えられています。

× ×

これは又あまりにも有名で遠近にまで響き渡っている祭りに「山田地蔵の白手拭祭り」というのがある。祭りというよりはむしろ因習の信仰といった方がよいかもしれません。

この祭りは、旧暦三月二十三夜の祭りの日、胥嶽道の園に地蔵尊境内の裏庭の竹林といわず雑木林といわず、白手拭をかぶって顔をかくした女がうようよする程集まるというのです。なぜかといいますと、昔の婦人が腰から下の病の平癒を地蔵尊に心願をかけて、それが治りますと三月二十三日の縁日に感謝の願ほどきに集っている姿なのです。当時は医薬の幼稚な時代ですから、下のやまいは婦人たちにとっては今では考えられないほど深刻なものがあったと思われます。この習俗は、当夜の願ほどきに人知れず男に当ると女の願がほどける、というので、二十三夜の白手拭は毎年々々押すなの盛況であったと申します。



さて昔、その中に離かの婆若がおりました。夫に内緒で御願ほどきに行ったのです。ところが丁度いい男にぶっかったのです。あまり具合がよかったので記念の指輪を彼に渡しました。そして、そしらぬ顔をして家に帰っておりましたところ、日ならずしてその指輪が夫の許にあったというナンセンスまで飛び出して夫婦共々秘密がばれたということです。

この祭りは現存しません。明治初年に風紀取締りがきびしくなって、今日では全く影をひそめています。

すのは何と申しましょうか。ですから、今の老人方にも、話は伝わっているだけで経験者は全然ない筈です。いささか淋しいような気のする心得者のいることは確かなんですがね。

ところで、明治以後の御願ほどきはどうしていたでしょうか。写真で見られる通り、其の後は女子の下半身を絵に描いて、年令等を書き入れて地蔵尊に奉納する方法がとられています。

× ×

現代の常識で「白手拭祭り」を唯単にどうこうというのは当りません。東俗だといって一言の下に片附ける前に現在の世相を見てごらんなさい。隋時隋所に変テンな風俗が見られるじゃありませんか。百年も経ったら、宮城前の風俗やロカビリ族大陽族らが何といわれるでしょうかね。

宗像人会開催さる

沖ノ島の忌詞について（三）

町村往来

宗像伝説　祭りさまざま　其の九

"狂える獅子の歌"

——越智汎愛氏の半生記録歌文集紹介——

本誌に度々御寄稿下さっている大島中学校の教諭越智汎愛氏がこの度「狂える獅子の歌」と題して総数二十六頁に及ぶ歌文集を出された。氏半生の貴重な記録であり、一読、情熱のほとばしるムードが読者の胸を打つ。

氏自ら「私の半生の決算」と言っておられるごとく、時期は昭和三年十一月から全三十六年八月迄の記録である。

歌数は一一九首、夫々に簡単な解説が試みられている。「ウソを言わない」ことを主義として書かれたものだけに先にも述べた通り、その真実性が感じられるものである。

昭和三年十一月（中学卒業の年）

○狂いたる雄獅子の如く叫びたるわびしき心知る星もなきか。

「表現が大きすぎるが」と作者は断っておられるが、時代思潮である浪漫派が影響していることは否めない。立派な歌である。

○村祭楽の花畑に遠く聞く太鼓に笛にむかしおもほゆ

（昭10・4）

「二十三日田島八満様お降りの夜」と詞書がある。国学院大学を卒業して軍隊生活を終えた筆者が宗像社に奉仕していた頃の作。稚い日を、成人してから懐しんだ感じが緊直である。

○静かなる只静かなる処欲しアクセクとしていとまなければ

（昭10・5）

いきなり実社会に出て責任ある仕事をさせられて、不慣れなこと責任遂行のジレンマに悩む日々を送っていた時代の作、と断ってある。そこに

○苦しさよそは己が身の為なりと思い返してコブシふる今日

の負けじ魂が起って来るのである

○剣大刀宗像の神を祈りつつ今ぞ出で立つますらを吾れは

（昭12・9・10）

この時のことが一生のうちで一番印象が強かった、と作者が語っておられた。「九月十日未明起床みそぎをして白衣着かえ神殿（中津宮）の御扉を明けている時」に召集令状が来た。「いい知れぬ感激に、ほんとうに身も心も打ちふるわせながら朝の祭典を終った」としるしてある。「以来戦争中もこの歌を思い出しては、戦線をかけ廻ったもので、私には忘れ得ぬ歌の一つである」とある。かくて○川を渡り野に起き伏して幾百里の戦い終りて秋空高し

（昭12・11・29）

○山高み風吹き凍る陣中の春を明け行く天津光に

（昭13・1・1）

「十一月五日未明中略敵前上陸をした中略私達の分隊は分隊長以下四人がたおれた。私は幸い右足のかすり傷だけで済んだが、痛んで歩行が充分でなかったので後略」

この戦斗のあと小関を過てつくの歩行は この時を契機として一進一退、ついに歩行困難症となったのである。

○南京城雄叫び聞こゆ工兵の一番乗りの雄叫び聞こゆ

（昭12・12・17）

戦線は尚も苛烈であった。「雄叫び聞こゆ」の重複使用法がよくきいており、この歌の中には氏の持つ万葉集の教養の影響が見られる

○春や春春はあす来むその春を敵前渡河に若水くまむ

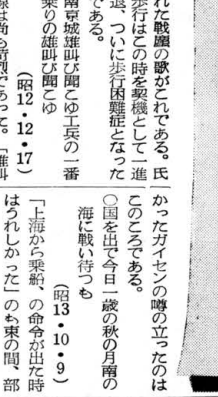
（昭12・12・31）

戦場にも春がめぐった。明日は元日という夜「草を枕に星空を仰ぎながら、明朝の敵前渡河には悉らく、命はないものと考えた」と述懐している。その間にあっても筆者の武人としての風流心があった。春を待ちこがれる心には、一日も早く故郷へ帰還することを願う心情も汲みとられる。

○山高み風吹き凍る陣中の春を明け行く天津光に

（昭13・1・1）

「十三年元旦朝日を仰ぎながら道路に整列して東方遥拝した時には助かった」という喜びをつよく感じた」とある。杭州湾上陸から南京作戦とたたかいはたしなられた戦蹟の歌がこれである。氏



かったガイセンの噂の立ったのはこのころである。

○国を出で今日一歳の秋の月南の海に戦い待つも

（昭13・10・9）

「上海から乗船の命令が出た時はうれしかった」のも束の間、部隊は転じて南支バイヤス湾敵前上陸命令が下された。「月の浮えた夜であった」としるされている。「一度助かると、命はだんだん惜しくなるものである」とあるくだりには人間の真情が見える。

○炎熱の此処南支の野に立ちてわが三十才の春を思へり

（昭14・1・1）

「戦争とは歩くことなり、とつぶやく兵も居た」とある通り、屋夜の別なく広東へ向って進撃が続く足の治療が続けられた。松葉杖塘という所で三十才の春を迎えたのである。「こんな処で」と感慨無量であったという。さもあろう。筆者すでに七年兵であった。

全年八月二十三日の歌に

○三度吾れ傷つきまれも残れどもやが在くべし新戦場

噂の出ていた帰還命令はなかく出なかった。そんな事を考える暇もなく戦火は続いたのである。南支をかけめぐるうちに三度目の負傷をした時の歌である。十五年六月漸く召集解除になった筆者の心情、思いやるだにケワシイものがある。

○いつ見ても富士は豊けし今日とそは新妻と見る汽車の窓辺に

場面は急転倒する。昭和十六年一月十九日作の歌。歳末に筆者は福岡の岩田屋で見合をした。一月十五日結婚。人生の春が廻って来たかに見えた。母校国学院大学に職を得て生活は東京へ移った。四カ年程の平穏な生活が続いた。十九年七月再び召集を受けた。

○目覚めては夢なつかしき雪の夜の夜着かいだきて子等を思へり

「十日兵舎で」と題記がある。昭和二十年二月のことである。三才と二才の子供が母親に連れられてよく面会に来た。今の平和台にある福岡連隊勤務中の光景。「これが最後の面会か」と幾度か観念したという。

○立ちあえぬ吾が病を養うと子等を残して妻は商う

（昭22・2）

「めまぐるしい、あまりにもめまぐるしい生活の転変である」と書かれているように、右脚の激痛を堪えている最中に終戦となった。帰郷入院、九月初旬九大に於て左腎臓摘出、右足にギプス。奥さんは病床に臥し、サンタンたる有様となった。それをおしての主婦の大奮起ぶりを歌い上げている。二月二十三日には母堂逝去。それでも筆者は動けない。五才、三才になっていた子供たちが筆者の面倒を見てくれた、とある所は涙無しには読めない。「必ずよくなる。必ず立ちあう」と自らの心を励ましつつ、更に神を信じ、斗病の決意を固めたのである。

○若草も花も小鳥も春待つと凍る風をも土も耐えおり

（昭25・3）

「卒業生におくる」と詞書きがある。其後イリコの製造を手伝い乍ら足の治療が続けられた。松葉杖に頼ってどうやら歩けるようになった筆者に村の中学校勤務の職が待っていた。一陽来福の春が遂にやって来たのである。

○春や春春はまた来ぬこの春も泌々と思う秘秘ゝ丘

同じ頃詠まれた歌である。昭和十二年の暮、南京戦線で若水を汲んだ「春や春」の歌の帰結としてこの歌がある。「ようやく生活も安定し始めた」「私は遂に病気に克つことが出来た」「不自由ながらもこれから負けないぞ」心の奥底からほとばしり出たいのちの叫びに支えられて、筆者は教師という聖職に精進されている。

○大島は菁がふるさとなるぞ黒潮の色も響も称へむ菁れは

○海山のあなだに建てる学び舎に旗ひるがへし卒業を祝ふ

○かしましき子等のさけびもおさまりてたれが弾くのか放課後のピアノ

○ふと思ふ知命の年を過ぎたれど狂える獅子はまもアクセク

大略抜粋されば以上のようである。また「沢山の秀歌と短文があるがの甘切れない。「狂える獅子が豚になった」とケンソンして筆を擱かれている。越智先生御一家の御多幸を祈って御紹介を終る次第である。

日本過去百年の歩み

仰陽僑居童問（其の六）前月につづく

超喜叟 出光佐三

日露戦争

に乗じ、露国の専横を憤慨する声は国内随処に起り、盛んに、我国の対外外交の強硬を主張し、しばしば、政府及各政党の領袖に対して警告を発するも続出し、帝国大学の七博士は満州問題の研究を発表して与論の喚起に努めるというようなこともあった。明治三十六年秋の頃に至り、露国の態度はいよいよ苛烈を極め「満州の鮮群に対し露国は自己の当然の政策を進展しめつゝあるのに、之に対し、日本が干渉がましきことをするのは不都合だ。小癪にも生意気な干渉がましいことをするならば、鎧袖一触、忽ち叩き潰してしまうぞ」と唱喝する態度を露骨に現わすに至った。かくて、明治三十六年はこの際緊張の雰囲気の裡に暮れ、明治三十七年の新春を迎えたが、日露両国の形勢は一層険悪に赴き、今は外交を断絶するか、進んで干戈を交えるかの関頭に立つに至った。こゝに明治二十八年三国干渉の苦杯を喫してより十年間全国民が既往の辱を通じの臥薪嘗胆の辛苦をもって営々積み上げた国力を以て乾坤一擲、国家生存の道を求むることに決し、遂に明治三十七年二月六日露国に対し外交断絶を通告して日露戦争を開始したのである。

宣戦の詔書

「惟フニ文明ノ平和ニ求メ、列国ト友誼ヲ篤クシテ以テ東洋ノ治安ヲ永遠ニ維持シ、各国ノ権利利益ヲ損傷セズシテ、永ク帝国ノ安全ヲ将来ニ保障スベキ事態ヲ確立スルハ、朕既ニ以テ国交ノ要義ト為シ旦暮敢テ違ハザランコトヲ期ス。朕カ有司モ亦朕カ意ヲ体シテ事ニ従ヒ、列国ト誠実ノ関係ヲ増進ス赴クヲ見ル、今不幸ニシテ露国ト意端ヲ開ク二至ル、豈朕カ志ナランヤ。

帝国ノ重キヲ韓国ノ保全ニ置クヤ一日ノ故ニ非ス、是ト両国ノ累世ノ関係ニヨルノミナラス、韓国ノ存亡ハ実ニ帝国ノ安危ノ繋ル処ナレバナリ。然ルニ露国ハ其清国ト朋約及列国ニ対スル累次ノ宣言ニ拘ラズ、依然満州ニ占拠シ、益々其地歩ヲ強固ニシテ終ニ之ヲ併呑セントス。若シ満州ニシテ露国ノ領有ニ帰センカ、韓国保全ハ支持スルニ由ナク、極東ノ平和又素ヨリ望ム可カラズ。故ニ朕ハ此機ニ際シ切ニ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ、以テ平和ニ恒久ニ維持セント期シ、有司ヲシテ露国ニ提議シ、半歳ノ久シキニ亙リテ屢次折衝ヲ重ネタルモ、露国ハ一モ交譲ノ誠ヲ以テ之ヲ迎ヘズ、昨日弥々徒ラニ時局ノ解決ヲ遷延セシメ、陽ニ平和ヲ唱導シ、陰ニ海陸ノ軍備ヲ増大シ、以テ我ト屈従セシメントス。凡ソ露国ノ始メヨリ平和ヲ愛好スルノ誠意ナルモノ認ムル由ナシ。露国ハ既ニ帝国ノ提議ヲ容レズ、韓国ノ安全ハ方ニ危急ニ瀕シ、帝国ノ国利ハ将ニ侵略セラムトス。事既ニ茲ニ到ル。帝国カ平和ノ交渉ニ依リ求メントシタル将来ノ保障ハ今日之ヲ旗鼓ノ間ニ求ムルノ外ナシ。朕ハ汝有衆ノ忠実勇武ナル臣民ノ輔翼、速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ、以テ帝国ノ光栄ヲ保全センコトヲ期ス。」

かくて、我陸海軍は明治三十七年二月以来露国の陸海軍と戦い、翌明治三十八年五月末までの約一ケ年半にて露国の陸海軍を徹底に撃破して、遂に露国をして降伏に至らしめたのである。

K生。「この露国に勝った戦争の経過を少し御話して頂けませんでしょうか。」

先生。「よろしい。五分間休憩してから、話しましょう。」

露国と戦争が始まったと話したとき、流石に学童たちの顔には緊張が漲り、固唾を呑んで膝を正し、真剣に聞き入るのであったが、いよいよ露国に勝ったとの結論を述べたときには、学童一同は緊張から一時に解放され、おほえず、一同は萬歳を絶叫し、自分が勝ったような気持で、喜色を満面にたたえているのである。同時に、小さい日本が、どうして、どの位勝ったのか、少年の胸中には想像を遥かに超過した話を待ちわびている。

日露戦争の概況

先生。「さあ、日露戦争の実況のあらすじを話しましょう。」

明治三十七年二月九日、瓜生海軍少将の率いる第四戦隊（浪速、高千穂、新高、対馬、須磨）、千代田は陸軍の護送として仁川に向ひ、木越陸軍少将の率ゐる混成旅団の上陸掩護を了えた後、仁川に在りし露国軍艦ワリヤーク、コレーツの二艦を撃沈したのが、実に日露戦争勃頭第一の交戦であった。旅順に向った海軍の本隊は二月八日夜、旅順に在る露国東洋艦隊を敵逐隊で攻撃し、敵艦数隻に損害を与へ、翌九日更に旅順港内の露国軍艦に砲撃を加えた。是により引続き港内の敵艦を攻撃し、更にその効果を全うする為に、数回旅順港口に船を沈めて港口を閉塞して、敵艦隊の出動を妨遏することに努めた。海軍の本隊が旅順方面の敵を攻撃している間に、上村海軍中将の率いる第一艦隊は浦塩港方面の敵を攻撃に従事した。当時の第一艦隊の主力は出雲、八雲、磐手、吾妻、浅間、常磐の六装甲巡洋艦であった。旅順における露国東洋艦隊の司令長官は当初スタルク海軍中将であったが、間もなくマカロフ海軍中将が代り、四月十三日、旅順沖で我海軍の本隊（三笠、初瀬、八島、朝日、富士、敷島の六戦艦）と交戦の際、その旗艦ペトロパウロスクに撃乗していたが、我海軍本隊の撃沈され、その旗艦と共に悲壮な最後を遂げた。さて、我陸軍の方は黒木陸軍大将の率いる第一軍（近衛、第二、第十二師団）は四月上旬には金軍平壌を占領した。奥陸軍大将の率いる第二軍（第一、第三、第四師団）は五月上旬遼東半島の塩大澳に上陸、前面の敵を逐次撃破し、蹴ぶる我陸軍の第一第二軍は連絡して、遂次、露軍を満州の北方に圧迫するに至った。九月四日には遼陽の敵を攻撃して之を占領した。然るに、敵は再び遼陽奪天間の沙河に来襲したので、戦闘数日の後、遂に之を撃退したのである。開戦以来我近海に横行して暴虐を逞うし、我国民の切歯する所であった浦塩艦隊も、我第二艦隊のために撃沈された。即ち対馬海峡を扼する第二艦隊は九月十四日蔚山前方で浦塩艦隊の南下するに会い、直ちに戦闘を開始しリユウリック撃沈し、ロシヤ、グロンボイの二艦は多大の損害を被って浦塩港に敗走したのである。

我陸軍の大部分が露軍を満州の北方に逐次撃滅しつゝあるとき、その背後に在る旅順要塞の敵を撃滅する必要が迫っていた。之れは露国のバルチック艦隊が東洋に進出する前に旅順を攻略せねばならなかったからである。そこで旅順要塞攻略の為第三軍が第一、第十一、第九師団で編成され、乃木陸軍大将之を率いることになった。乃木大将の率いる第三軍は沿道の要塞を攻略し、漸次旅順の攻撃に移った。一方我海軍はこの第三軍と密接の連絡のもとに、旅順港内の攻撃に協力し、六月二十三日には敵艦隊を港外に誘出して大なる損害を被らしめ、尋で八月十日、旅順港内にあった敵艦隊が脱出を企て、我艦隊の封鎖線を突破して、浦塩艦隊に合流せんとし、司令長官ウルトゲフは、その金艦隊を率い舳艫相馳んで港外に出て来たので、我艦隊は之を邀撃した。ウルトゲフは戦死し、敵艦隊は全く混乱、一部は再び港内に駆入し、他は子那の膠州湾其他の港湾に逃げ入り殆ど潰滅に帰した。堅牢なる旅順の要塞に対し、八月十九日以降陸上の総攻撃が数次に亘り行われたが、敵の防守頑強にして容易に抜くことは出来ない。この間我第三軍は多数の戦死者を出した。然もバルチック艦隊の東航は日を逐って、その行程を進め、且満州北方の野にある露軍は段々援兵を増加し、進んで旅順との連絡を企てようとする気勢さえもあって、我旅順攻撃軍が水く停滞するとき、形勢が逆転する虞もあった。そこで、第七師団が第三軍に加わり、十一月廿六日第三回の総攻撃を開始した。その総攻撃は悲戦苦闘洵に壮烈極りないものであって、所謂肉弾、白襷隊の名は永く当時の惨烈を偲ばしむるものである。かくて十二月五日最要衝地点（二〇三）高地は我軍の占領する所となった。この「二〇三」高地からは旅順要塞内を見下すことが出来るので、全く敵の死命を制し得ることになった。これから、逐次附近の堡塁を攻略し、十二月下旬には旅順占領の大勢は全く定まった。越えて明治三十八年二月二日敷海ラスッセルは開城降伏を決意し、その方法を協議することを申出た。翌一月二日水師営で協議の結果、一月十三日我軍は旅順に入城し、完全に之を占領した。この旅順の要塞は露国が永年多大の精力及財帑を費して築造せる防備を有し、其堅牢、難攻不落と称せられていたが、我軍の百戦不屈、遂にこれを攻略したことについては正に世界を驚嘆せしめたものであった。

旅順既に陥落し、乃木将軍の率いる第三軍は北上して、我満州軍に加わり、いよいよ大決戦が、満州の野に展開された。この大決戦が奉天の会戦というのである。その決戦の概要は次のとおりであった。

（次号に続く）

投稿歓迎！

全国の読者諸氏の投稿を歓迎いたします。論説、随想、コント、連絡、報告文書等何でも結構です皆様の投稿によって「宗像」の紙面が賑やかになり、全国の会員の動静等が掲載されゝば、他地区の方々が喜ばれると思います。「宗像」誌上にも、皆さんの互譲互助精神を発揮せられんことをお願いします。原稿は毎月十五日迄に届くように宗像大社々務所宛御送付下さい。あとは編輯部にお委せ下さい。